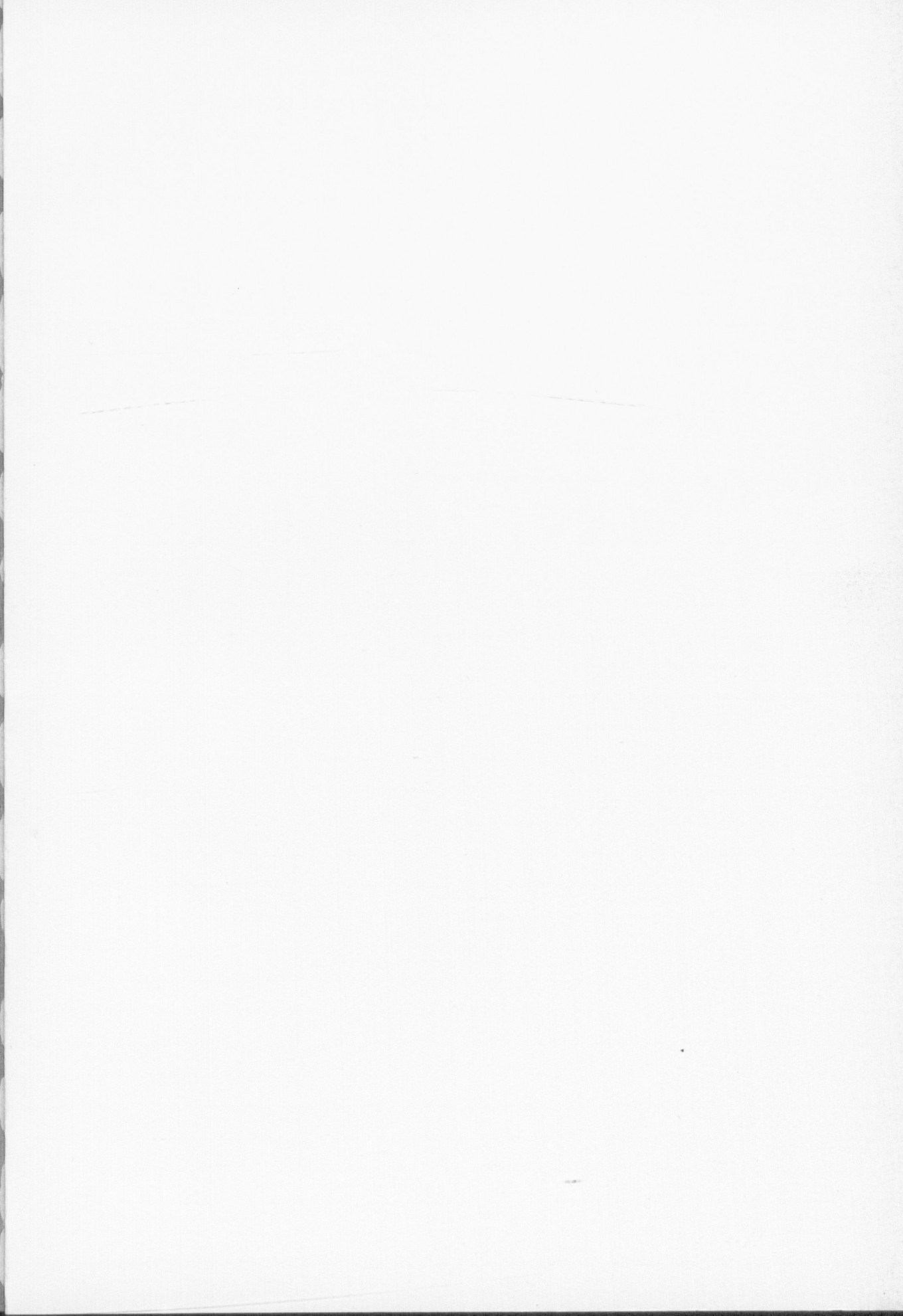


盟連羽灰

脚本集 第壹卷



安倍吉俊



はじめに

この本を手にとっていただいて、どうもありがとうございます。

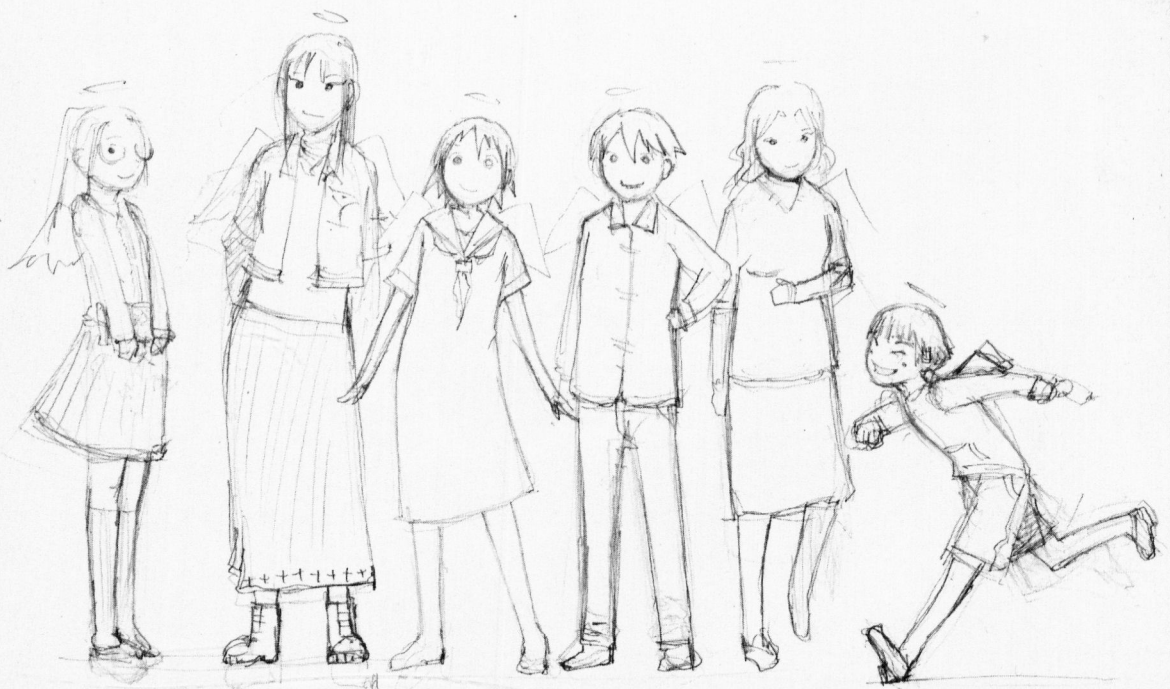
この本は、2002年に放映された『灰羽連盟』というアニメのシナリオ、設定画を集めたシリーズの第一巻になります。

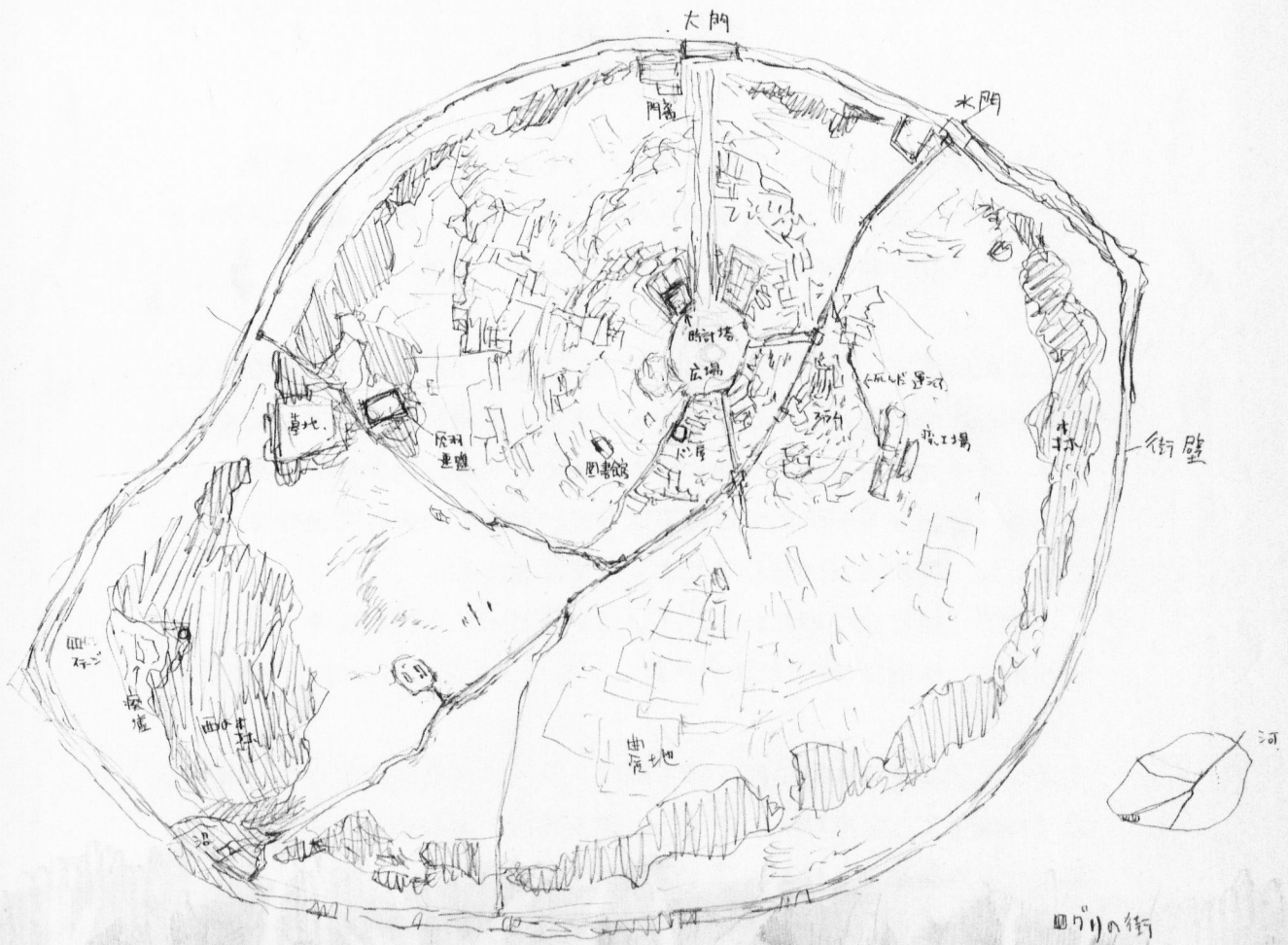
仕事の関係で、7月のほとんどを海外で過ごす事になり、本の編集に関われる時間が3日しかとれなかった事と、素材があまりにもたくさんあり、どう並べたら読みやすいかを考えるための試験期間が必要になったため、全話分を一冊にするのではなく、何冊かに分けて発行する事になりました。毎度ばたばたしてしまってすみません。

1巻で1話という形式だと、13話分まとめるのに6年半かかってしまうので、今後は1冊で数話分収録し、もう少し厚い本にする予定です。

テレビアニメの本数は年々増え続け、多くの作品が消費され、忘れられてゆく中で、2年経った今でも、多くの人がこの作品の事を憶えていてくれる事をととても嬉しく思っています。

2004年7月5日 安倍吉俊





灰羽 連盟

LA FILLE QUI
A DES AILES CAISES

HAIBANE - RENMEI

灰羽連盟

脚本・安倍吉俊

第01話 繭・空飛ぶ夢・オールドホーム

第6稿 (2002.05.27)

● ページの上半分がシナリオになり、下半分が、シナリオに対応した注釈や、図解になります。

タイトルの『空飛ぶ夢』、という単語は、『空を落ちる夢』とした方が適切ではないか、という意見がスタッフからあった。そうかなとも思ったが、言葉の響きの簡潔さと、高校の頃好きだったZARDという音楽グループの『飛行夢（そらとぶゆめ）』というアルバムのタイトルにかけて、このままにした。

偶然だけど、エンディングテーマの『夢』『翼』を歌ってくれたZARDというグループには、もとZARDのメンバーの上野洋子さんがいた。

○登場人物

ラツカ(少女)

レキ

カナ

クウ

ヒカリ

ネム

灰羽の男の子A(シヨータ)

灰羽の男の子B(ダイ)

灰羽の女の子A(ハナ)

●空飛ぶ夢

昏い空。深い紺色の闇の中を白い点がゆっくりと下に移動している。カメラ寄る。点に見えたものは、白い服の少女だと分かる。少女は頭から落ちてゆく。

紺色の闇の他に何もないため、落下していると言うよりは宙に浮かんでいるように見える。ただ、ゆったりとした白い布が強くはためているため、風を切って落下しているのだと分かる。少女は目を閉じている。眠っているような安らかな表情。

一羽の黒い鳥が画面を横切る。落下してゆく少女に気づき、旋回し、少女に近づこうとするが、少女の落下速度が思いのほか速く、追いつけない。鳥は羽を畳み、首をすくめて黒い塊のようになって少女に追いつく。鋭い鳴き声。少女、ゆっくりと目を開く。

少女「……ここは？」

鳥、何かを訴えたがっているかのように、激しく鳴く。羽を広げるとすぐに減速してしまい、慌てて追いつこうとする。そのしぐさはどこか滑稽で人間臭い。

少女、手を伸ばして鳥を捕まえ、抱きしめる。

少女「……私、空を……落ちてるんだ……。不思議、何で怖くないんだろう」

鳥、警告を促すように鳴く。

少女「……私の事、心配してくれるの？」

鳥、再び鳴く。

少女「……ここ、どこなんだろう……。ふわふわしてて、温かくて……。でも、胸がチリチリする……。怖くないけど、心臓が、冷たい……」

鳥、少女の手から身を振りほどき、翼を広げる。少女の白い服の袖をつかんで、引き上げようとするが、突風に煽られた傘がひっくり返ってしまうように、羽が風圧に負けてバンザイのような姿になってしまう。鳥、必死に羽根をひらこうとするが無理。

少女、首を振る。

このシーンの背景の空のグラデーションがどうしてもうまくなくて、スタッフの方々が何だかずいぶん苦労したようだ。僕も見させてもらったが、スタジオのモニターで観ると大丈夫なのに、民生のテレビだと、フルカラーの画像を無理やり単色に減色した時のような色の境界が見えてしまった。全体に彩度の低い画面なので、乗なのかと思っていたが、色が鮮やかな方が、細かい差が気にならない分、再現性は高いのかもしれない。

少女「ムリだよ。でも、ありがとう」

鳥、爪を離す。あつと言う間に少女と鳥は離れていく。

周囲の紺色の闇がだんだん明るくなり、青空の色になつてゆく。日陰から突然明るい陽射しの中に飛び出すように、周囲が光に包まれる。青空の中を、少女は落下してゆく。厚い雲を突き抜けると、地上が見える。緑と、いくつかの建物。

実景が見えた事により、落下していると言う事実と加速感がにわかに現実味を帯びる。

少女、悲鳴を上げるが、声は聞こえない。ホワイトアウト。

●オープニング

●サブタイトル

●オールドホーム、西棟3階

薄汚れた、暗い廊下が長く続いている。古びたドアが並ぶその廊下を、引つ越しの荷物を重そうに抱えて歩いているレキ。大きな荷物の姿がほとんど隠れて、煙草の煙と光輪だけがひよこひよこ揺れている。

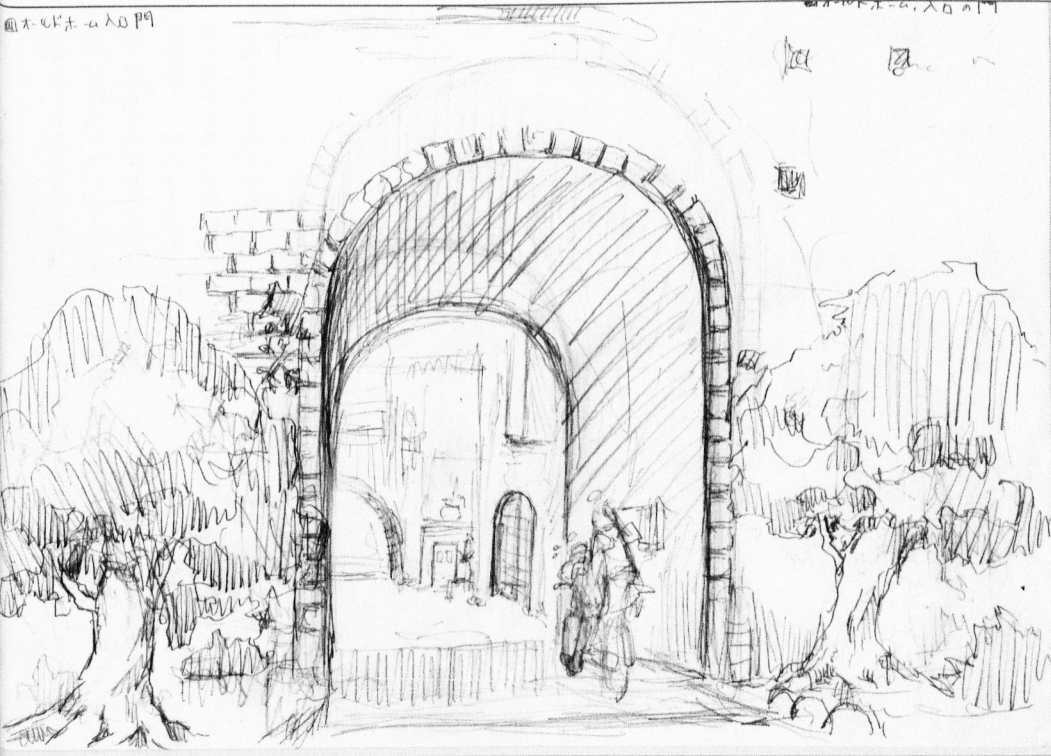
通りかかったドア越しの室内から、ガシャンと言う物音。不審げにドアを開けるレキ。ぎよっとする。白い巨大な球根のような菌が、部屋中に根を伸ばしている。

レキ「うわあ、こりゃ大変」

レキの口から煙草がぼろりと落ちる。レキ、両手いっぱい荷物を放り出し、ぱたぱたと来た道を駆け戻っていく。階段の踊り場に消えたかと思いきや、またぱたぱたと駆け戻ってくる。落ちた煙草をバンバンと踏み消して、また反転。

レキ「大変！大変！！」

●オールドホーム、外の門



オープニングやサブタイトルの位置は、脚本ではこんな感じで指定するらしいです。最初知らなくて、表記していなかったら「オープニングどこだ!？」と怒られてしまった。ちなみに、全シーンのシーン名が『空飛ぶ夢』になってましたが、あれも、本当は『アバンタイトル』と表記しなければいけないみたいです。この頃は本当にシナリオの書式が全く判らず、数字を半角で書いて注意されたり、不必要な改行がやたらあったり、尺が全然あっていなかったり、大変でした。

■最初に描いたオールドホーム正門。美監の片平さんに「樹が小さいよ」と指摘される。最初のイメージでは、オールドホームは6階建てくらいで、それに合わせて壁も高く設定されていたが、全体に高さのある建物が増えると、必然的に街を囲む壁も高くなり、圧迫感が出るので、全体に建物の背を低く描き直していた頃の名残り、ちょっと建物を大きく描いてしまう傾向があった気がする。

古びた、厚みのある石壁にアーチ状の門がある。壁が厚いため、ちよつとしたトンネルのよう。そのトンネル状になっている門の中の壁に、使われていない守衛所の窓とドアがある。その脇に掲示板と出欠表がある。出欠表の年長組の欄には『眠(ネム) 磔(レキ) 光(ヒカリ) 河魚(カナ) 空(クウ)』の札が下がっている。その下に年少組の欄があり、8人程の子供の名前がある。出欠を表すように、札はくるつと裏返せるようになっており、両面に色違いで名前が書いてある。

レキ、ネム、クウが赤い文字、ヒカリとカナが薄いオレンジの文字。

掲示板には、『灰羽連盟回覧板』とあり、『カゼに注意、うがいをお願いします』とか『好き嫌いをしない』などの子供向けのほけんだよりのようなものや、『最近、連盟に無断でアルバイトをする灰羽がふえています』のようなものなど(読ませる必要はない)が張られている。それらを押しつけるようにひととき大きく、『マユ発見! 西棟4階、関係者以外立ち入り禁止。年長組は至急 Δ 中まで』と書かれている。その脇にチラシの裏のようないい加減な紙にマジックで乱雑に『ねんしょうぐみは はいっ ちゃダメ! レキより』と殴り書きされている。

ヒカリとカナが自転車に二人乗りで門をくぐって来る。自転車はオンボロで、キコキコと間抜けな音がする。カナがこいでヒカリが後ろに立ち乗りしている。カナ、守衛所の窓の前で急停車。ヒカリ、ぴよんと飛び降り、回覧板の脇にある出欠表を見る。

ヒカリ「わあ、みんなもう来てる」

カナ、自転車を無造作に壁に立て掛けて

カナ「街から遠いんだよな、もう。レキのスクーターは一人乗りだし」

カナ、掲示板のレキの年少組に向けた派手な注意書きを見て、あきれた調子で

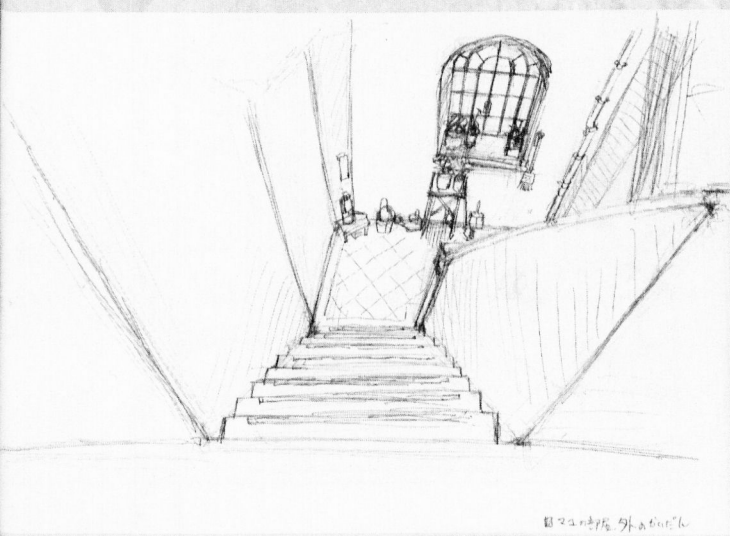
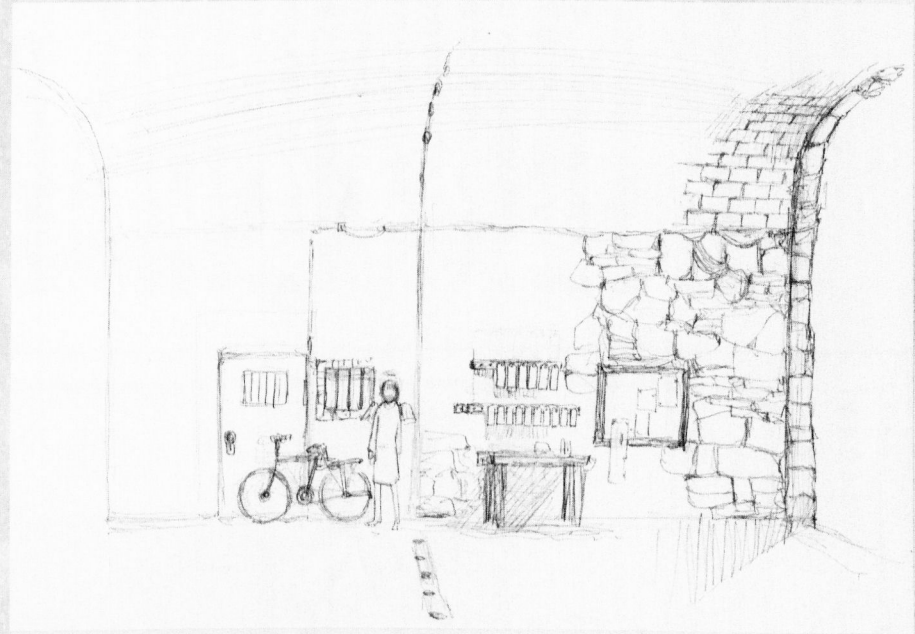
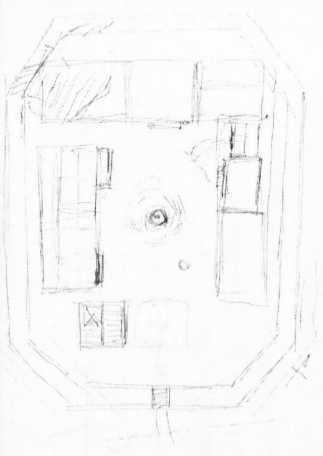
カナ「これ、逆効果じゃねえの?」



木の札の出欠表は、僕の通っていた大学にあったものが元ネタ。ヒカリが立ち書きしているとあるが、実際やると超ハンチラになると、結構危ないということから、ハブの辺りに足を乗せている姿勢になった。

■悪い例

■左は、最初に描いたオールドホームの見取り図。これを見ながらイメージを膨らませた。右は、正門の内側の初稿。下が2稿。初稿にはガスのメーターのようなものがある。が、このあたりは、フランス旅行中に見かけたアーチ門のディテールに影響されている。



■初めて描いた設定画の一枚。階段がちよっと急すぎる。まだ定規を使わず、全てフリーハンドで描いていた。ラフでもいいから素早く手を動かして、イメージが逃げてしまわないように必死だった。

■2007年 外 6/16



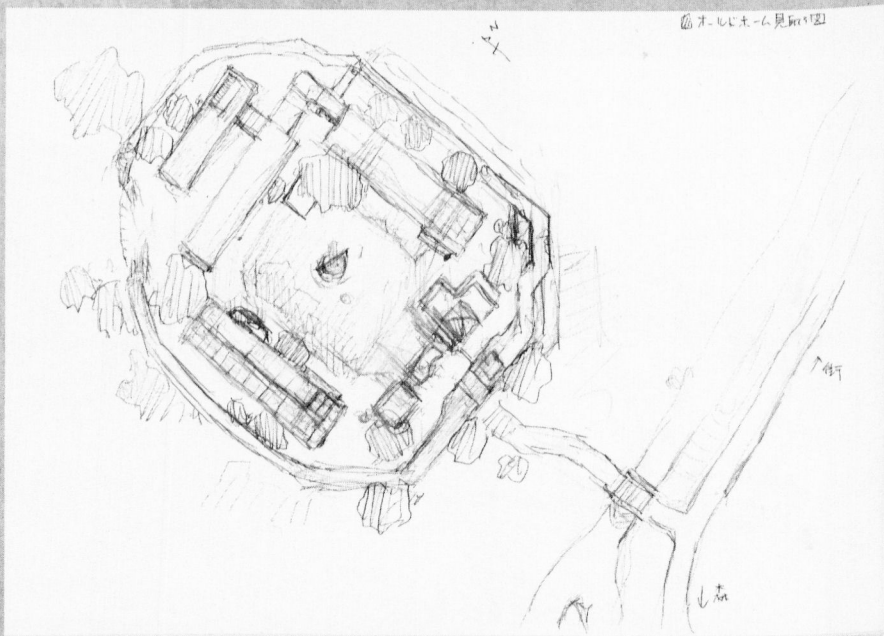
■上は、気に入っている一枚。前々ページの正門の絵のでも、奥のラッカはちょっとだけ大きい。自分の絵だと、パースもフリーハンドだし、物の大小の関係も雰囲気ですってしまふのだけど、たくさんの人が設定として使う絵ではそういう曖昧さは許されない。このあたりから、地平線と消失点を設定して定規でパースを取り始める。

アーチ上部のブロックは、描くのが大変だったけど、美術監督のボードでは漆喰のようなもので固められて、はがれた部分からブロックが覗くようになっていて、ブロックの並びが単調にならず、かつ最小の手数で描けるようになっていた。うまい。

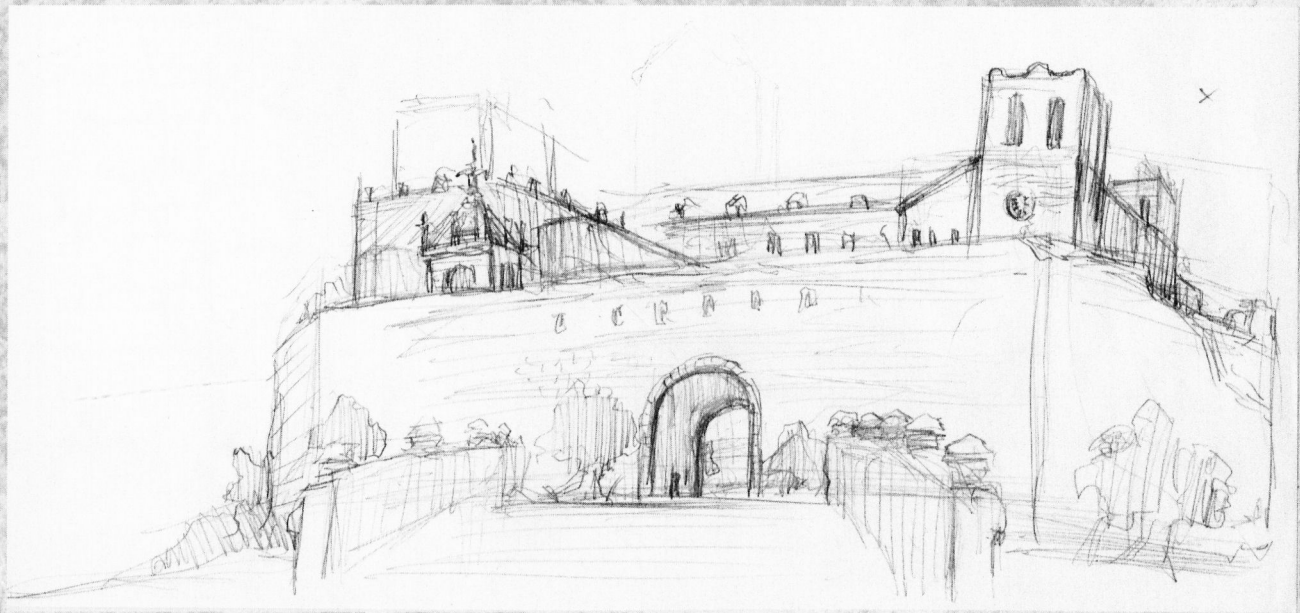
右はオールドホーム全景。建物の位置関係がややはっきりしてきている。

北側の壁が壊れているが、北第二棟はまだ破損していない。

オールドホームの北側が壊れている事については、設定があったが、物語中に出す機会がなかった。

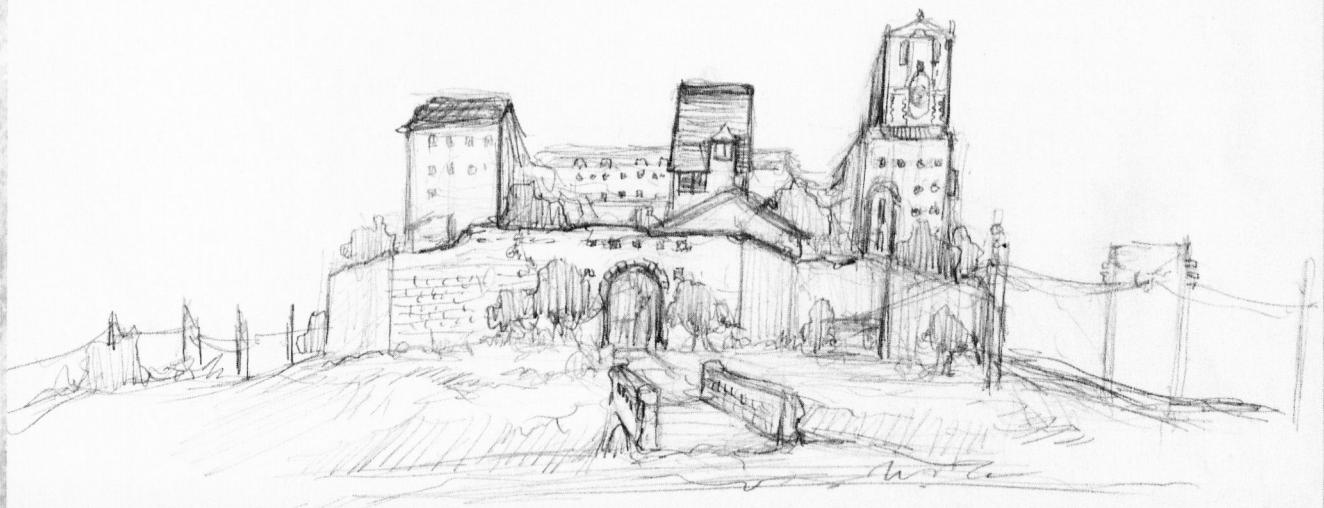


○オールドホーム見取り図

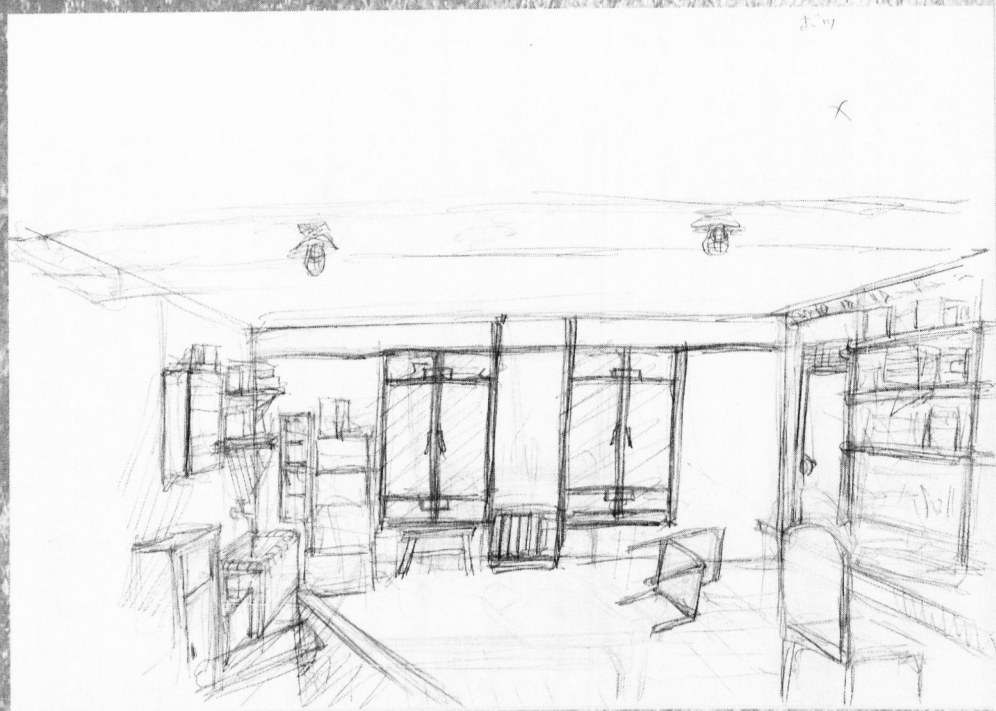


■ オールドホーム外観、初稿と2稿。どちらもまだ階層が高い。イラストなら、ただ美しいシルエットだけを考えればいいが、設定画なので、見取り図を描いたり、建物の内部構造との整合性を考えたり、物語上で使用するレイアウトを考えたり、いろいろ大変である。

旧オールドホーム外観







■ 前の部屋。これもごく初期の絵。何気なく窓をふたつ描いて、あとで建物の外観を描いた時、窓の間隔と部屋の広さを計算して、辻褄が合っていないので慌てて直した。
 こういう散らかっている部屋を描く時、何を描けばいいのかとっさに思いつかず、いろいろ資料の写真を漁ったりしているうちに、膨大な時間を浪費したりする。



に、底辺と上部から根を伸ばし、部屋中のガラクタを押しつけて鎮座している。見ている間にも、ゆっくりと根が伸び、古家具を押しつけている。

クウとネムが室内にいる。クウはうれしそうにふらふらと落ち着きなく繭のまわりをうろついている。クウ、両手を広げて

クウ「うーわ。でっかい」

カナ、ヒカリ、レキが入ってくる。カナ、繭を見上げて

カナ「こりゃホントにすごいや」

ネム、ほんやり立っているが、カナ達に気づき

ネム「遅刻だよー(咎める風ではなく)」

カナ「連絡が遅いんだよ。仕事抜けてくるの大変だったんだから」

ヒカリ、繭を見て感動する。

ヒカリ「最初はタンポポの綿毛くらいの大きさなんでしょう。育つところ、見たかったなあ。やっぱり、もっとこまめに見回りしなくちゃ駄目ね。レキが偶然見つけなかったら、このまま孵化しちゃってたかもしれないし」

カナ「アタシら5人でこのクソ広い建物全部見回れるわけないじゃん。こんだけでっかくなりゃ嫌でも気づくって」

ヒカリ「そっか……」

ネム「表面が灰色になってきてるね。もうすぐ孵化するのもかも」

レキ「とにかく、この部屋だけでも片づけてあげようよ。こんな物置きみたいな部屋で生まれたらかわいそうだ」

クウ「ほんとうにこん中に人が入ってるの？」

レキ「そ。クウも私も、灰羽はみんなこうやって生まれて来るんだから」

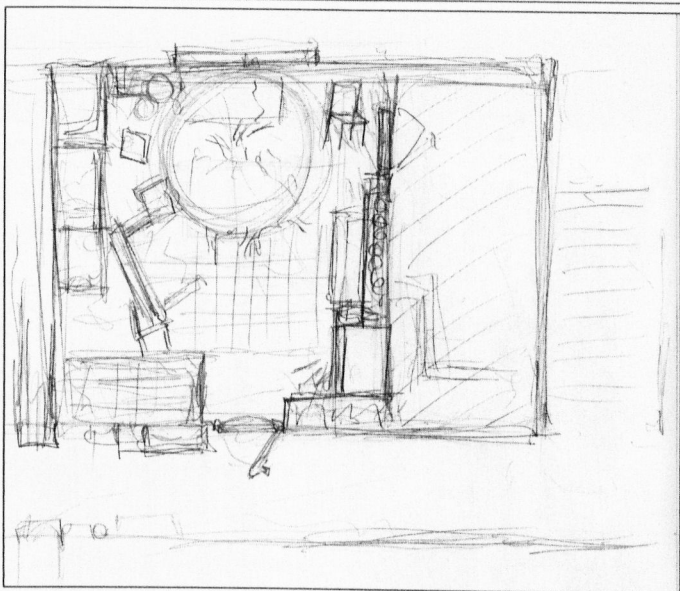
灰羽の男の子A(ショータ)「わー！でっけー！おばけタマゴだ！」

灰羽の男の子B(ダイ)「おっばっけー」

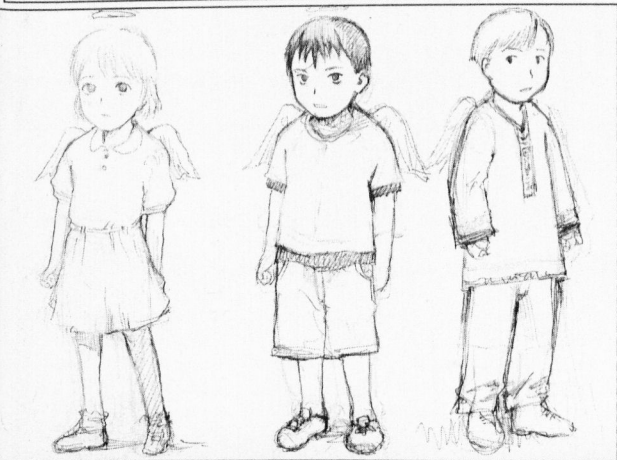
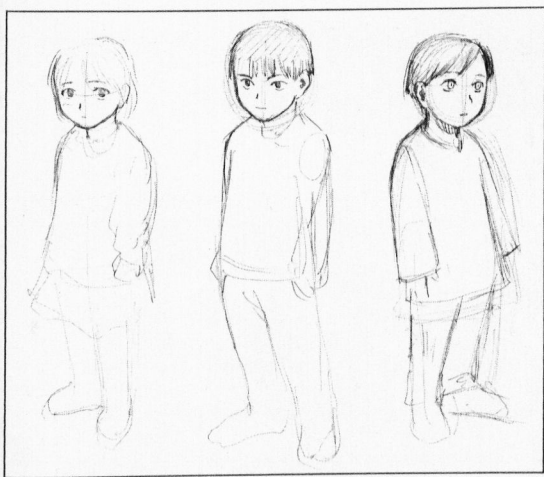
レキ「あっ！まだいた！」

レキ、ドアを開ける。子供たち、キャッキヤと騒ぎながら逃げてゆく。レキ、やや小走りに後を追いつつながら

レキ「あの部屋は絶対立ち入り禁止だからね！……まったく、チビ共はヤジウマなんだから……」



■上は繭の部屋の見取り図。左は年初組初稿と2稿。繭の設定画はなし。同人誌の絵をそのまま設定にまわしてもらった。



腰に手を当て、走り去る子供たちに睨みをきかせるレキの背後でネムがぼそりと呟く。

ネム「自分が一番はしゃいでるくせに」

ヒカリ「嬉しいんですよ。私も楽しみだな。新しい仲間」

クウ「クウも楽しみ。妹みたいだといいな」

カナ「いやー、クウン時よりでっかい繭だからな」

クウ「えー」

カナ「さ、掃除掃除」

クウ「いじわる」

● 繭の中

植物の種子の内側のような繊維質の壁で出来た空洞の中に水が満ちている。その中に漂うように浮かんでいる少女。ゆっくりと目を開く。

少女「ここは……」

少女、あたりを見回す。

少女「夢……?」

少女、ほっと息をつこうとするが、こぼっと泡が出て驚く。

少女「息が出来る……?まだ夢が続いてるみたい……」

壁面に触れる。へちまの中のような、スポンジ状の内壁は、触れると指がめり込み、ぼそっと崩れる。強く搔くと、崩れた壁面の先に堅いカラが見える。首をかしげる。

少女「声が聞こえる……」

少女、壁面をこんこんと叩いてみる。

少女「外に誰かいるんだ……」

● 繭の部屋

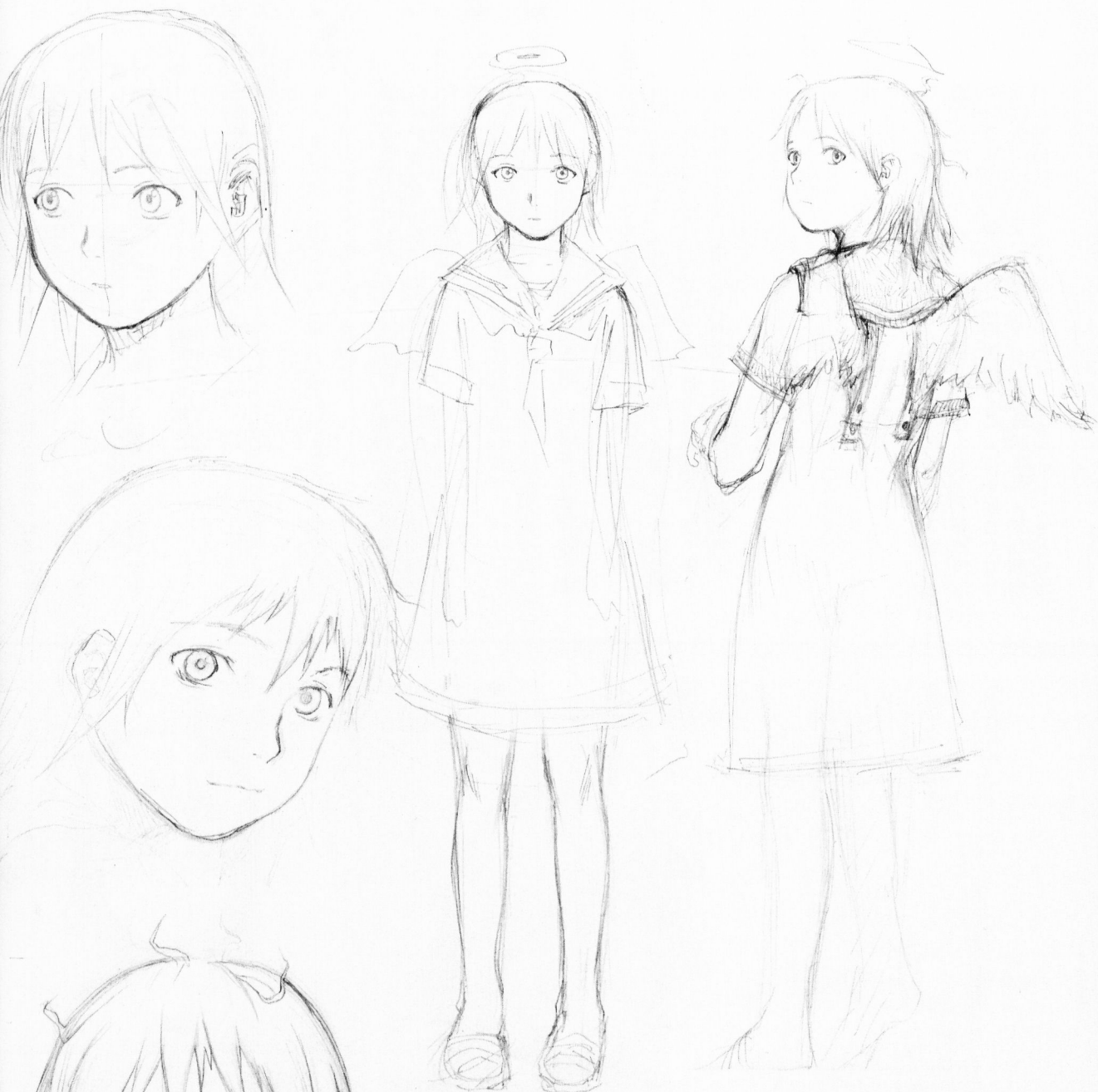
だいぶ片づいている部屋。カナがうんざりという感じで繭にもたれている。対照的にてきぱきとモップを片づけているヒカリ。繭はより『孵化しそう』という感じになっている(ビジュアル思案中。少し時間が経過したのが分

で、役主描く
て、描か
ま、か
固、何
々、何
期、何
案、な
っ、わ
色、変
初、顔
カ、は
ラ、に
■ イ
ラ、は
イ、に
メ、に
は、に
困、に

孵化しそうな変化は、いろいろ考えたけど、バッチリというのがなかった。

やや外向きの
イメージ





■上は立姿2点。ちょっと内股気味に、という指示と、背中中のスリットの初期設定。最初、セーラー襟がもう少し長くて、襟にもスリットが入る図を描いた所、なんとなく違和感があったので、襟の短い物を描いて、こちらにしようと思ったら、キャラデの高田さんの描いた、襟にスリットの入っている設定画が全く違和感がなかったので、結局お蔵入りになった気がする。

左ページの全身像はもっとも初期のもの。同人誌1巻の巻末に載せたイラストの絵同様、やや活発な顔をしている。

■ラッカについては、ずいぶん描いたつもりでいたけど、設定として描いた物はそれほど多くはなかった。同人誌から設定を持ってこれた事もあるけど、描いた物を見返してみたら、著作権等で描いた物が結構あった。それは著作権物の下絵を紹介するコーナーを続刊で設けて、そこで紹介します。



かる感じで)

レキ「……さーて、そんじゃ、くじ引きで見張り番を決めようか」

レキ、こよりで作ったくじを片手に。

クウ「わゝ(拍手)」

カナ「カッター。もうさあ、割っちゃえばいいじゃん。そのへん

のトンカチかなんかで」

ヒカリ「なんてこと言うの!」

レキ「駄目だよ、シキタリなんだから。自力で殻を割れないと、強

い子に育たないって」

カナ「ヒヨコかアタシらは」

ネム「見張りなんて、寝てりやすぐよ」

レキ「それじゃ見張りになんないでしょ!」

繭に耳を付けているクウ、不意に

クウ「ねえ、今、こんこん、て言った」

レキ、こよりの束を片手に

レキ「は?」

コンコンと再び繭から音。

クウ「ほら」

全員、ずさつと駆け寄り、繭に耳を寄せる。皆の顔の前

で、繭の表面にびしつとヒビが入り、ぴきぴきと広がっ

てゆく。

全員、期待する表情だが、ヒビの間から決壊するダムの

ように水がぴゅーぴゅーと漏れ出すのを見て、次第に表

情が変わってくる。

レキ「……ありゃ?」

ヒカリ「わっわっ……!」

繭、盛大に割れる。悲鳴。部屋の外への廊下。繭の部屋の

ドアの隙間から、溢れた水が廊下に噴き出す。暗転。

●オールドホーム、ゲストルーム

真っ白い空間の中に少女が横たわっている。少女、ゆつくりと目を開ける。ふかふかした白い物にくるまれている

この時点では、レキはまだ孵化まで数日かかると思っているようだ。

自力で殻を割れないと強い子に育たない、というのも、実は結構重要な設定だったが、作中で使う機会がなかった。

水吹き過ぎ(笑)。



■ゲストルーム、ラフ。この雑な線画を元に、助監督の大森さんが超かっこいい設定画をあげてくれた。パースの大切さを学びました。

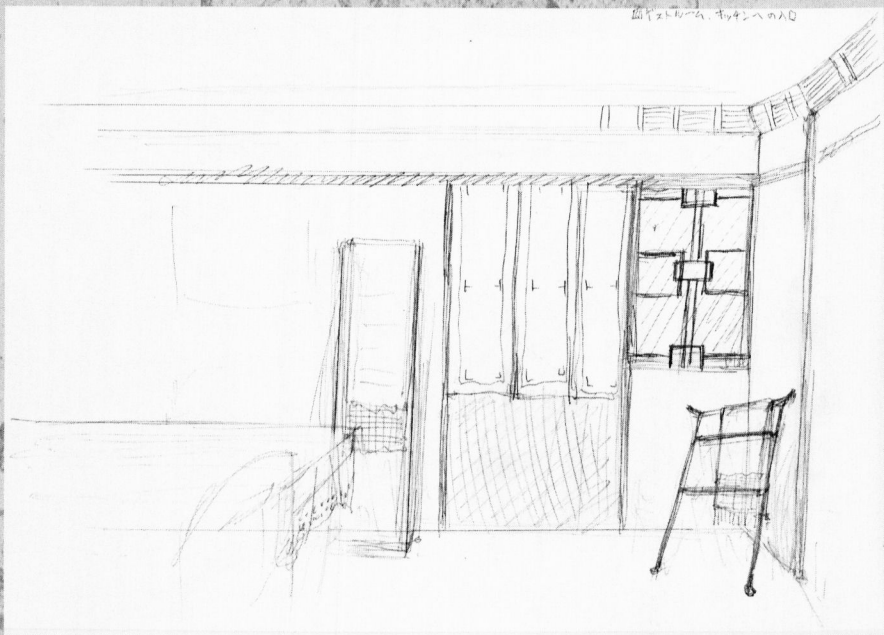


図1261-6、キッチンへの入り口

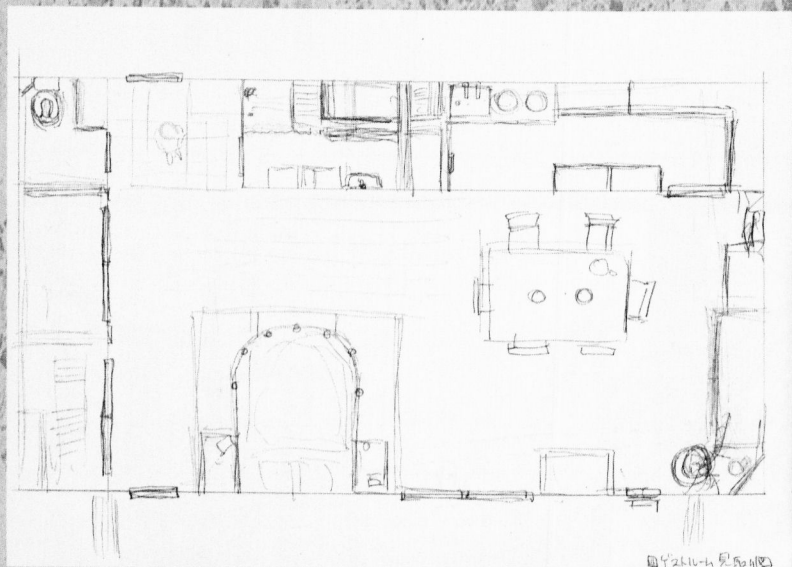
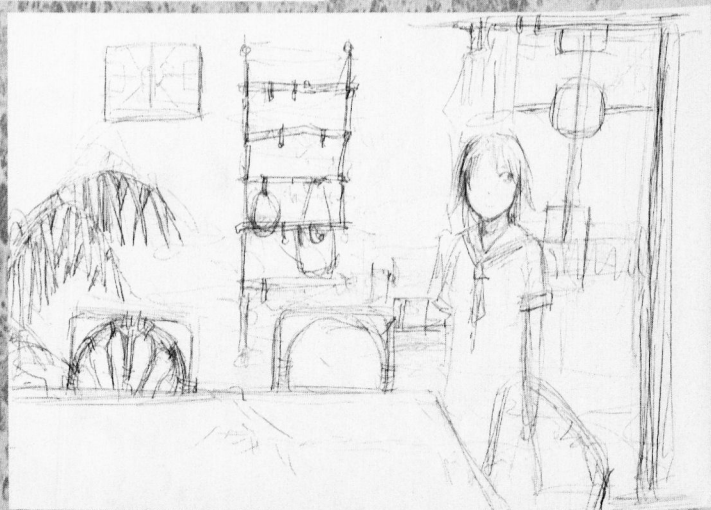
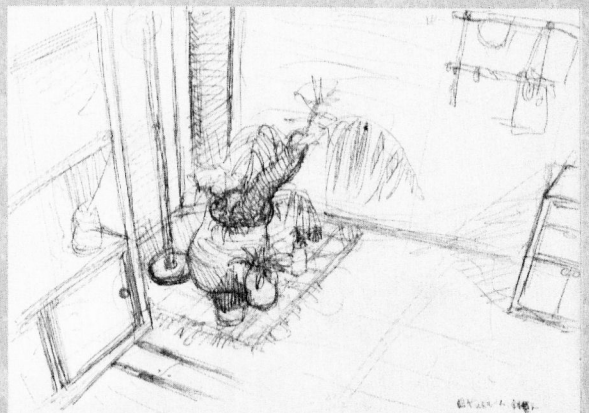
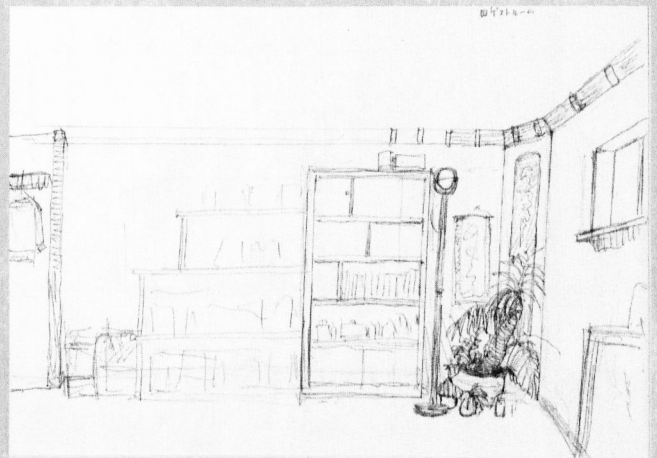
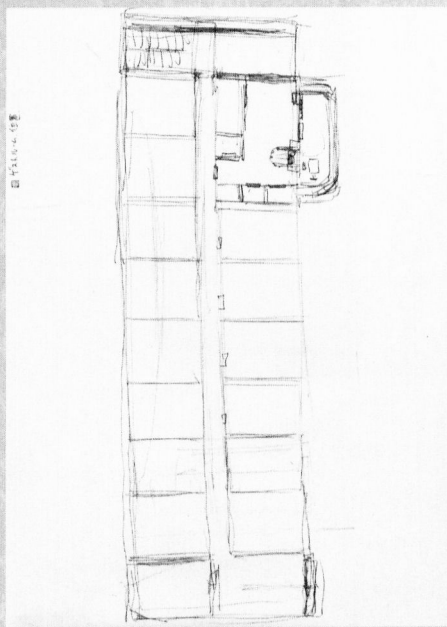


図1261-6、見取り図

■上から、キッチンに続く入り口、全体見取り図、テーブル付近。どれも取すかしいほどにラフ。ゲストルームだけ、西棟の他の部屋と間取りが違う。二間分くらいの広さがある。キッチンの入り口の左に立て掛けられているのは姿見。布をかけてある。よくこんな荒い絵で、何が描いてあるか伝わったものだ。



自マコ部屋の外
廊下



■上は廊下。左は建物の見取り図のごく初期の設定ラフ。廊下の両側に部屋がある設定だったが、そうすると廊下に窓がない事になり、光を使って時間を表したりできなくなり、演出がやりづらいという事で、部屋は廊下の片側だけになった。従って上の廊下の設定も間違い。右下は、ベッドから見た部屋の隅と、そこに置いてある鉢植えの設定。ここにおいてあるスタンドは、僕がアメリカに行った時に買ったもの。先日倒れて壊してしまった。

少女「雲の中……。まだへんな夢が続いているんだ……」

少女、白いふかふかの枕をぎゅっと掴んできつく目を閉じる。掴んだ物が枕であることに気づき

少女「……。あれ？」

少女、おそるおそる身を起こす。学校の教室程度の広さの部屋の一角にあるベッドの上に居たのだと気づく。西

洋風の石造りの壁と、アジア風の家具の部屋。

少女（どこだろう……。知らない空気。知らない部屋）

少女、着ている服に気づく。

少女「こわこわする……。夢の中ではふわふわだったのに……（袖を鼻に近づけ）木の実みたいな匂いがする……。いたっ」

少女、背中違和感に気づく。
不意にドアが開き、レキ達がどやどやと入ってくる。

レキ「あ、起きたんだ。ごめん、ちょっと買い出し」
クウ「丸一日寝てたんだよ。びっくり」

ヒカリ「だから私が留守番するって言ったのに」
カナ「ヒカリはワツカ係じゃん」

少女「えっと、あの」

レキ、ぱんぱんと手を叩いて

レキ「ホラ、いっぺんに喋らない。混乱しちゃうじゃない」
カナ「ハイ」

レキ、ベッドの傍らに腰掛け
レキ「ごめんねバタバタして。私はレキ。ここ私の部屋だけど客間

みたいなモンだからしばらく自由に使って」
レキ「あんたがゲストルームを私物化したんじゃない」

レキ「だから引越すってば。ええと、順を追って説明するね。タ
バコいい？」

少女「あ、はい……」
レキ、藤椅子を引き寄せて背もたれに肘を置いて座る。

背もたれが腹側に来る座り方。煙草をくわえ、イスの背もたれの上に置いた手の甲の上に顎をのせる。

レキ「じゃ、まず、あなたの見た夢を話して」
少女「夢？」

レキ「そ。見たでしょ。繭の中で眠っている間に」

この辺り、漫画のネーム（僕は一度文章で物語を起こして、それからコマ割をします）をベースにしている。セリフなどは結構直したけど、まだ脚本という形式に不慣れで、硬い感じがする。



■初期のレキの一枚。前髪どうするか少し迷っていた頃。

藤椅子は、セルの場合と背景の場合とどちらもあり、どちらにせよ非常に面倒なデザインだったの、もう少し簡単なものに変えようか悩んだ。結局、この椅子のフォルムが、オールドホームの雰囲気に貢献しているという事でこのままの形で進める事になった。
単に線が多くて描くのが大変というだけでなく、この椅子の背もたれの向こう側を人が歩いて通りすぎる場合などに、ドーナツの穴状になった部分があると、ひと手間増える場合がある、という事だったと思う。それでも、この椅子は気に入っていたのでやってみたらよかった。

少女「え……………」

レキ、ちよつと表情を曇らせ

レキ「あ、ゴメン。怖い夢だった？」

少女「うん平気……………」。えつと、なにかすくく高いところからまっ

すくすうつと落ちていく夢」

クウ「うわー！あたしとおんなじだあ」

ヒカリ「どうしよう。かぶつちゃうね」

少女「??」

クウ「あたしの時は空をふわわただよってるみたいな夢だったん

だ。だから空って名前」

ヒカリ「灰羽は繭の中で見た夢を名前にするの。私は真っ白な光の

中にある夢。だからヒカリ」

カナ「私は河の中を魚みたいに漂ってる夢。だから河の魚って書いて河魚」

レキ「その他には？何かなかった？」

少女「……………」何かを見た気がするんだけど……………。思い出せない……………」

…」

レキ、上を向き、うーんとうなる。煙草の灰がぼろつと、

落ちる。レキ、落ちた灰を見て

レキ「じゃ、落つこちの落下にしよう。あなたの名前はラッカ」

ラッカ「名前って……………。あ、あれ！？私の名前……………」

レキ「あなたが何者であったのか、もう誰も知らない。もちろんあ

なた自身も。(ヒカリの方を振り向き)ヒカリ」

ヒカリ、ドーナツ型のフライパンのような器の蓋を開く。

中には光輪が入っている。ヒカリ、それをパン屋のパン

を挟むやつのような器具で挟んで、ラッカの頭にかざす。

ヒカリ「同志ラッカ。あなたの灰羽としての未来の標となるように、

この光輪を授けます。あ、まだ熱いから気をつけて」

ヒカリ、光輪を離す。光輪は一瞬輝きを増し、ラッカの

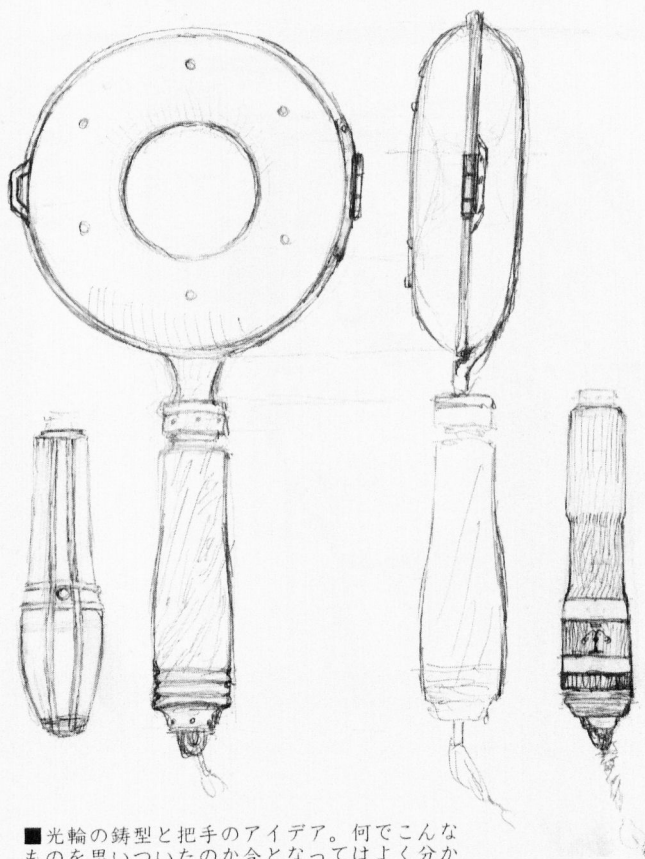
頭の上にとどまるとどまる。ラッカ、光が光輪を離れた

瞬間、驚き、首をすくめるが、光輪がふわりと浮いて頭

上にとどまったので、恐る恐る頭上を見る。

ラッカ「灰羽……………」

ラッカの頭上の光輪は一瞬神々しく見えるが、ふらふら



■光輪の鋳型と把手のアイデア。何でこんなものを思いついたのか今となってはよく分からない。

ネムの紹介がない。「話してみんなまとめて自己紹介するつもりだったので、カナの「ねぼすけのネム」というフレーズが重複するのを避けるためだったと思う。結果的には、ネムだけ(レキもだけど)紹介がないのもおかしいので、入れる事になった。

最初、レキはただラッカの夢の内容から『ラッカ』という名前を思いついただけで、煙草の灰が落ちたのは関係なかった。上田に「これ、煙草の灰が落ちたのにひっかけてんの？」と言われ、気づいた。

このあたりのレイアウト、僕の漫画の構図を非常に丁寧に再現してくれていて、観るたびになんだか照れくさくなってしまふ。

と安定しない。ラッカ、ゆらくつと頭からずれ始めたのに気づき、慌てる。

ラッカ「あれ……わっわっ！」

ヒカリ、パンばさみ（なんと呼ばば良いのか……）を手に駆け寄る。

間。厚紙とハリガネで補強され、頭に無理矢理固定された光輪。あせあせと笑うヒカリ。不安げなラッカ。

ヒカリ「うん、似合う似合う」

ふらふらしている光輪を心配そうに見上げるラッカ。手で支えたいのだが、熱くて触る事も出来ず、中途半端に手を差し上げた姿勢でおろしている。レキ、笑いながら

レキ「大丈夫だつて。2、3日でくつつくから」

窓から、午後を告げる街の時計塔の鐘の音。

クウ「わく。昼休みが終わっちゃう」

カナ、ペランダに続くガラス戸から外を見て

カナ「もう戻らなきゃ」

ヒカリ「今日は顔見せだけね。明日、羽が伸びたらまた来るから、

そしたらおしゃべりしようね」

ネム「レキ、あとよろしく」

どやどやと帰ってゆく一同。レキとラッカだけが残される。あっけにとられるラッカ。

レキ、やれやれといった感じで

レキ「やっと静かになった。大勢だとなかなか話が進まないからね。

……さて、何から話そうか」

ラッカ「ここ、どこなんですか？ハイバネ……つて？」

レキ、にっこり笑い、やや半身をひねって、これを見る、

という感じで自分の羽を動かしてみせる。

ラッカ「ほ、本物？」

レキ「あなたにもじき生える。背中に違和感はない？」

ラッカ「少し。……どっか寝違えたのかと思ってたけど」

レキ、表情からすつと余裕が消える。

レキ「見せて」

レキ、ラッカの背後にまわり、背中側の紐をひとつほど

自分で言うのもなんだけど、そういうのは調べないと……
 といいつつ、未だになんと呼ばばいいのかわかりません。やっぱりパンばさみ？

ヒカリたちが帰ってしまうのは、羽が生える時に付き添えるのは癖の発見者（と場合によっては年長者一名）だけと決められているから。

く。ぼつぼつと、赤い反転のようなものが浮かんでいる。
レキ「氷をとってくる（少し硬い声）」
ラッカ「えっ」
レキ「じっとして、準備してくるだけだから」

レキ、煙草を消し（灰皿はベッドサイドのテーブルか、もしくは携帯灰皿を持っている）速足で台所に、ラッカ、レキの声の緊張したトーンに驚き、返事をし損なう。

●キッチン

レキが準備をしている。洗面器、ブラシ、タオル。レキ、椅子（風呂場の椅子のちよつと高さのあるようなもの）に乗り、棚の高いところの扉を開け、古い木でできた救急箱を取り出すとするが、ふと手を止める。

レキ「あんまりものしいと、怯えちゃうか……」

レキ、救急箱はそのまま、棚の扉を閉める。

レキ「どのみち、薬は使えないだし」

レキ、ひとつ深呼吸。

●ゲストルーム

ゆっくりと陽が傾きつつある。

ラッカの背中。背中の開く手術着のような服。背中は肩胛骨のあたりが赤く腫れている。

レキ、氷をあてながら

レキ「ゴメン。羽の成長が思ったより早いみたい。本当は熱が出る前にいろいろ説明するはずだったのに……痛む？」

ラッカ「いたいってゆうか、ひっぱられるみたい。……攣りそう」

レキ「羽先が皮膚を破るときちくつと来て、そのあとわーつと熱が出るけど、一晩で寝ればおさまるから」

言葉のトーンが深刻にならないように気を使って話すレキ。ラッカ、熱を出して苦しそう。

ラッカ「か……がみ……」

レキ「見ない方がいい。見ると痛くなっちゃうから」

初稿にはなかったシーン。確か監督から、ゆっくり緊張感を上げてゆくようなシーンが欲しいという要請があり、追加した気がするのだが、結局尺が長すぎて入りきらなかった。

まだ尺の計算が全く出来ず、手探り状態だった。

ラッカの、

「いたってゆうか、ひっぱられるみたい。……攣りそう」

というセリフは、初稿では「筋肉痛みたい……」という表記だった。確かオーディションの時か何かで、声優さんに演じてもらう機会があり、声にするとかなり違和感があったので、慌てて修正した。

まだ読む言葉と喋る言葉の差が分かっていなかった。

ラッカ「そっか……」

レキ、髪を後ろで束ねる。

ラッカ「わたしたち……人間じゃないの？」

一瞬言葉に詰まるレキ。ゆっくりと、言葉を選ぶように

レキ「私たちが何者なのかは、誰にも分からない。とりあえず灰羽つ

て呼んでる」

ラッカ「うちに……かえりたい……」

レキ「灰羽はこの街からできる事はできないんだよ。……それに、こ

の世界のどこかにもしあなたの家族が居ても、今のあなたを

見てあなただとは思わないと思う」

ラッカ「……どうして？」

レキ「あなたがあなたの居た世界を思い出せないように、この世界

の誰も、あなたのことを覚えていないの。ここはそういう世

界」

ラッカ「なんで私なの？わたし……なんの取り柄もない普通の女

の子だったはずなのに……」

レキ「どうしてだろう……理由は誰も憶えていない……」

ラッカ「……」

レキ（はじまった……）

ラッカの背中の変色した部分の皮膚がわずかに裂け、羽

先が赤い針のように皮膚の下から顔を出す。つとと血が

流れ、背骨のくぼみに沿って細く流れる。皮膚の下で羽

が動くのが、皮膚の盛り上がり移動する事で分かる。

ラッカ「い……」

レキ「痛いつて言ってるらん。痛いのが言葉になって出ていくから」

ラッカ「……いたい……（か細く）」

レキ「そう。それでいい」

レキ、キッチン戸棚に走る。

●キッチン

レキ、椅子に乗り、戸棚を開け、救急箱をとり出す。ラッ

カを気にするように、のれんのある出入り口の方を向いた途端、ガタンと音がして、レキの姿が画面下に消える。

この辺りのセリフも、ちょっと固い。でも声優さんの芝居と、コンテ上の演出で、うまくまとめてもらっている。

キッチンの、僕の設定画はない。助監督の大森さんが、ちょっと描きたいイメージがあるから、という事だったのでお任せした。そしてまた非常にかっこいい設定画が上がってきた。キッチンはいい感じに生活感があったので、予定していたより多く登場させた。

レキ「わっ」

バランスを崩して椅子から転げ落ちたレキ。横倒しになった椅子の脇に尻餅をついている。救急箱もフタが開いて中身が少しこぼれている。

ラッカ「痛い痛い痛い」

ゲストルームからかすかにラッカの声が聞こえ、慌てるレキ。救急箱をつかみ、ひっくり返して中身を床に撒く。軟膏のような小瓶を拾う。ほどけて転がった包帯を見つ、意を決したように床の包帯を素早く拾い上げ、走る。

●ゲストルーム

レキ、ラッカに駆け寄りながら手早く自分の左手の親指に包帯を巻き付ける。それをラッカの口に当てがって

レキ「これ噛んで！舌噛まないように！！」

ラッカ「うーっ、うーっ」

ラッカ、痛みで目を閉じている。わけも分からず差し出されたレキの親指（の付け根）を噛む。うめき声がかくもった感じになる。

ラッカ「！！」

ラッカが声にならない悲鳴を上げる。レキも痛みで顔がゆがむ。その顔に血しぶきがぱっと跳ねる。

レキ「！！」

ラッカの背中を破って血と体液に濡れた羽がのびる。ずるり、という感じ。グロテスクであり、同時に神秘的であるような感じ。

●ゲストルーム。深夜

ラッカ、うつぶせに寝ている。レキ、ラッカの枕元に座り、無言で丹念にラッカの羽を洗っている。ペランダのガラス戸の向こうに月が見えている。月の光だけの薄暗い部屋。静かな空気。

ラッカ（モノローグ）『手足が冷たくて重い。肩と脇腹

同人誌では、スプーンに布を巻いていた。レキとラッカの関係性を表すために変更。

ところ監督が、「ここはやっぱり実際の大きさよりも羽を大きくした方が印象的だよ」と言っていたが、冷静に見直してみると、ほんとに大きい。たしかに、実寸だとさまにならないシーンかもしれない。

が、ときどき鋭く痛む。そのたびに背中の羽が痙攣するのを感じる。羽が体の一部になりつつあるのが分かる。自分の体が造り変えられてゆくみたいで、恐い。汗が目に入って痛い。何も見えない」

ラッカ「れき……いるの？」

レキ、うつむき、しずかに淡々とブラシを動かしている。羽を押さえている左手にラッカの齒の痕。

レキ「ん……」

ラッカ「何をしてるの？」

レキ「アンタの羽をきれいにしてる」

レキ、左手が羽を押さえていて動かせないの、ブラシに付いた羽を唇で挟んでとる。血のついたブラシを足下の小さなタライのような器の水で洗い、また羽の血を落とす作業に戻る。

ラッカ「ずっと……してる」

レキ「時間がかかるんだよ。血と脂をきれいに落とさないと、染み

になっちゃう」

ラッカ「手……へいき？」

レキ「ああ、これ？こんなの……（少し照れたように笑う）。今は自分の事だけ考えてな」

ラッカ「うん……頭が……あつつい」

レキ「明日にはよくなってるよ。嘘みたいにみなくなってるから」

ラッカ「……うん……」

レキ、顔を上げ、ラッカの顔をのぞき込むように

レキ「きれいな羽だよ。白くも黒くもない、きれいな灰色」

ラッカ、少しだけ微笑む。

ラッカ「……へへ」

● ゲストルーム。翌朝

翌日。輪に静電気で髪がひっついてしまい、仏頂面のラッカ。思わず吹き出すレキ。

この時点では、物語がどのように展開してゆくのか、細部までは確定していなかった。でも、このシーンの、レキとラッカの心の繋がりのようなものが、観る側に強く伝わる事が非常に重要だという感じはしていた。

レキがどんな気持ちでラッカの癖を見つけ、ラッカにどんな思いを託していたのかは最終話で明らかになるが、この時点では僕自身、レキの心の裏側は全く把握していなかった。にも関わらず、癖を見つけた直後のレキのはしゃぎようや、このシーンの言葉のひとつひとつなど、すべてのディテールが、きちんと伏線として機能している。自分で描いた物語なのに、なんだか不思議な気がする。

ラッカ「あっひどい！」

レキ「静電気体質？」

ラッカ「知らない！憶えてない。……この輪っかがヘンなのよ。直るの？これ」

不安そうに、ペランダへ続く扉のガラスを鏡替わりに、ひつついた髪をつまんで直すラッカ。

レキ、笑いをこらえながらラッカにブラシ（これは普通の紙を溶かすブラシ）を差し出す。

レキ「たぶんね」

ラッカ、必死に髪をなでつけるが、ドリフのコントのように、右を直すと左が跳ね上がる、という感じで徒労に終わる。

ラッカ、半ベソ。ふとガラスに映った羽に気づく。恐る恐る手を伸ばし、羽に触れる。

ラッカ「本物だ……」

ラッカ、半身をひねり、羽全体を映す。はっと気づき

ラッカ「レキ！もしかして、私が寝ちゃったあとも、ずっと羽をきれいにしてくれてたの？」

レキ、ポットから二つのカップにコーヒーを入れながら

レキ「ん？ああ、もちろん。きれいになってるでしょ（当たり前のこと、というニュアンス）」

ラッカ「（小声で）……ありがとう」

レキ、ベッドサイドのテーブルにラッカのぶんのコーヒーを置きながら

レキ「どういたしまして」

レキ、ほほ笑み、ベッドの傍らのイスに座る。

レキ「……そして、ようこそ、私たちのオールドホームに」

もっと言いたいようがあるだろうに……。



■ 上は同人誌版のイラストの線画。この絵で背景に何を描くか思いつかず、何となく絵のパネルを描いた。それがきっかけで、レキに絵を描いているという設定ができた。右はアニメ版の初期のレキの一枚。前髪どうするか少し迷っていた頃。

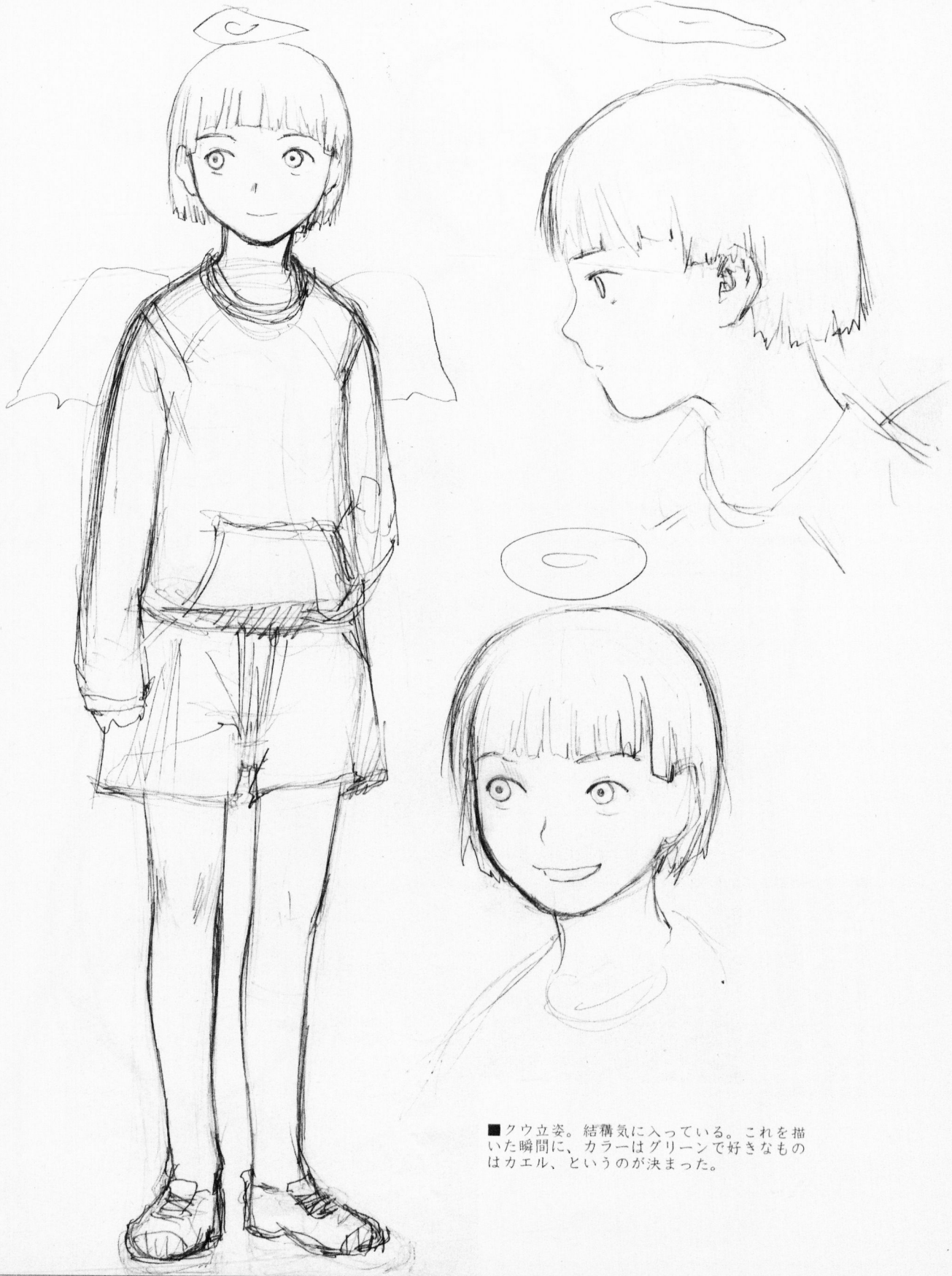




■気に入っている一枚。これでレキのイメージがほぼ確定した。

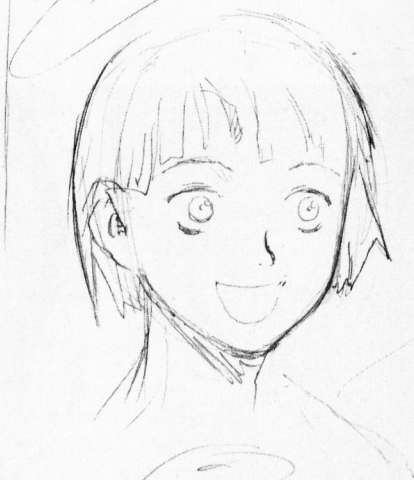
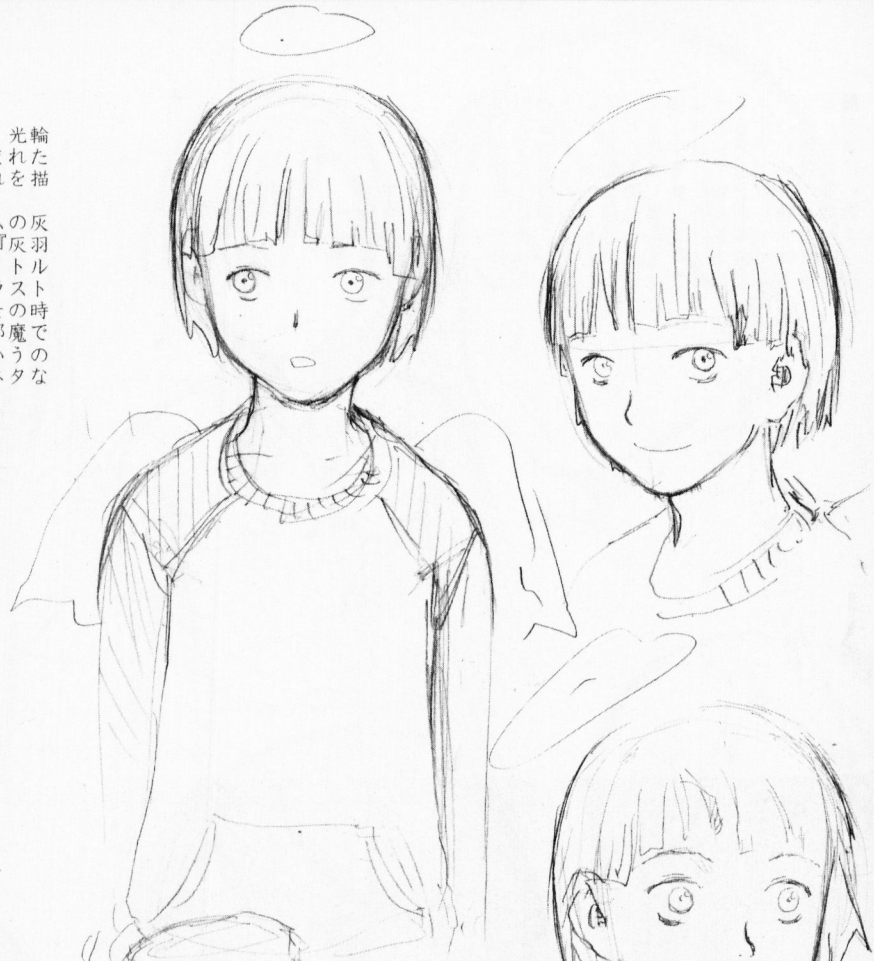
■レキも、大量に描いたような気がしていたが、設定画はこれくらい。





■ クウ立姿。結構気に入っている。これを描いた瞬間に、カラーはグリーンで好きなものはカエル、というのが決まった。

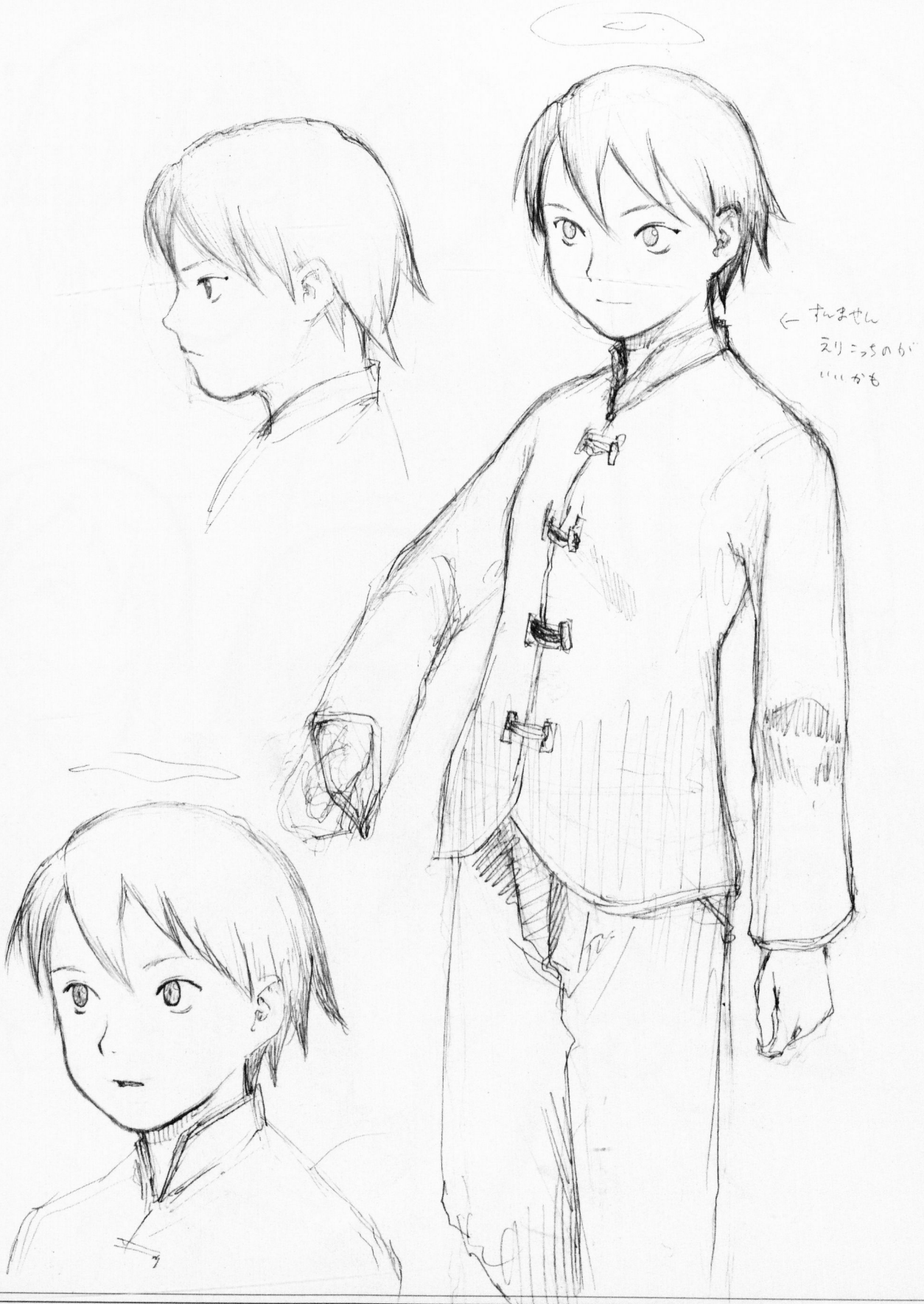
■帽子案。これを描いてから、光輪を帽子で隠すという設定が生まれたのか、設定をつくったからこれを描いたのか、記憶が曖昧。『オールドホームの灰羽連盟』という同人誌の前、『灰羽連盟』という同人誌のまんまのタイトルで、天使キャラをつかたり、その時のネタをひとつに、わっかが邪魔で帽子がうまくかぶれない、というのがあり、それが根本にある元ネタなのかも知れない。



■カナ。キャラは固まっていたのだけ
 ど、絵の描き方で、スけいな調整、決定稿の高田さん





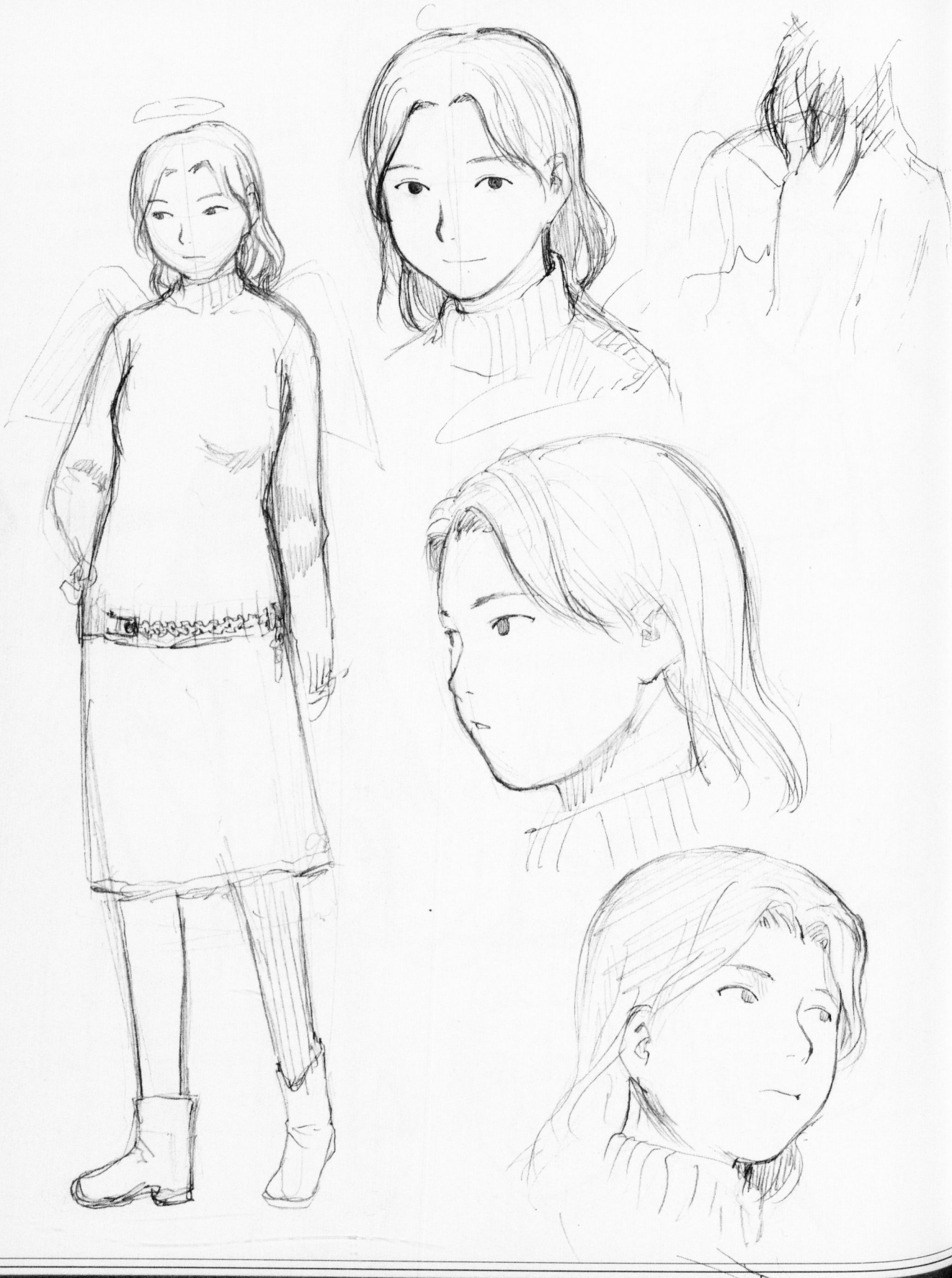




■ ネムは、見た目も性格設定もはっきり決まっていたけど、僕の出した設定ではちょっと地味すぎるといった意見があり、微調整を繰り返した。結局最初に近いところに落ち着いた気がする。

■ ちょっとイケイケ気味の(?)
ネム。激しく違和感があり、
自主的にボツに。







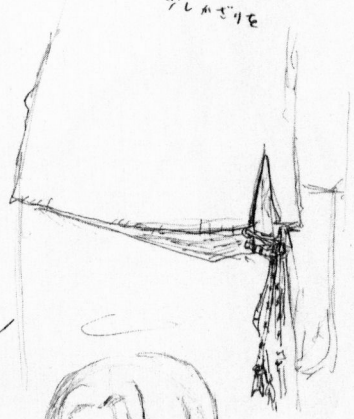
シングルで
足元のゆるい感じ
199cm
(=50kgくらい)



少しお
育の199cm

↑
元々のこの線が
おぼろげに見えるのが
できないセーター
見えないがまあ...

シングルでた
たしなむ

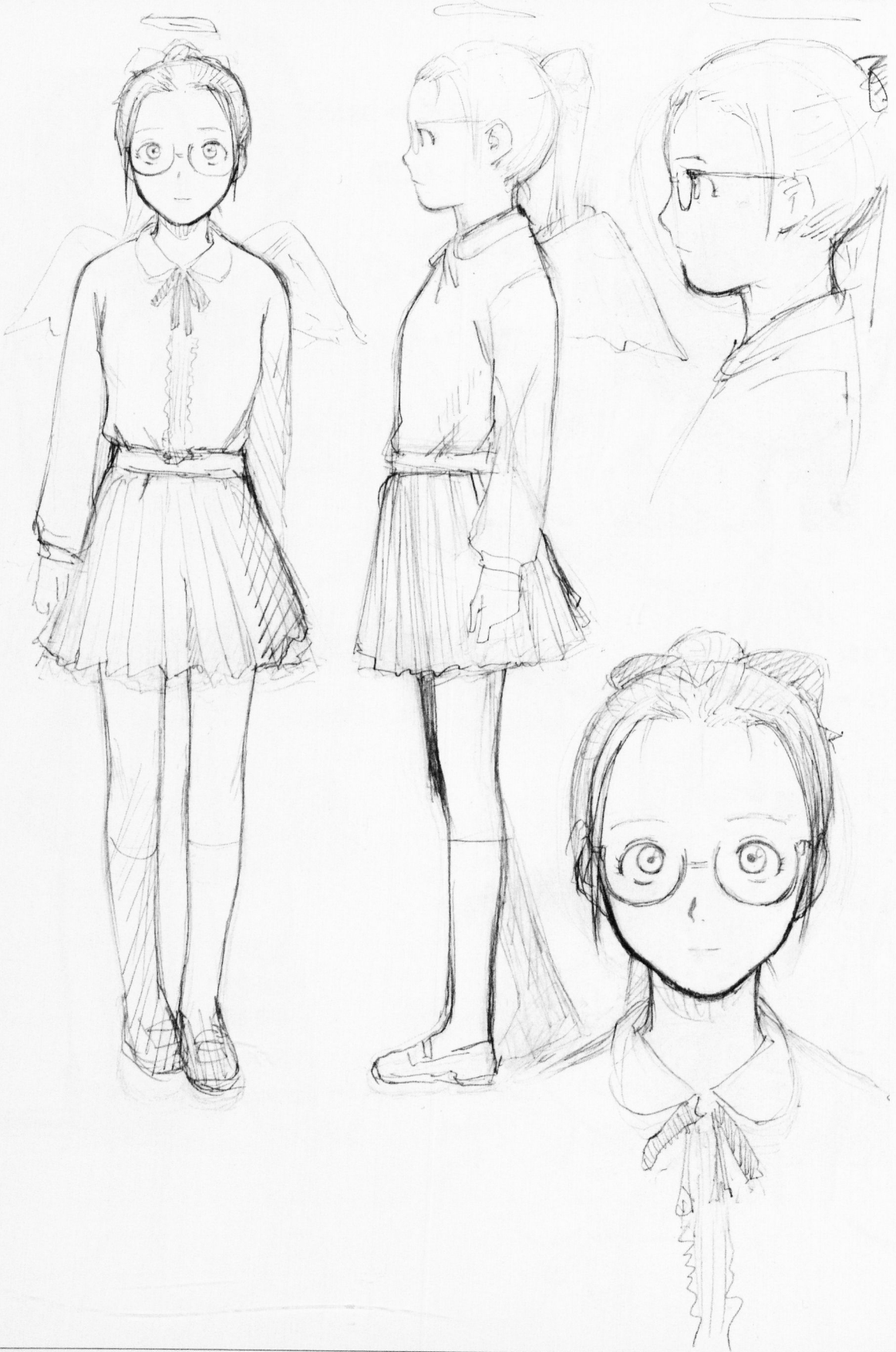




■ ネムのネックレス。葡萄の形をしている。最初にラフを起こした時塊起の急目、ネックレスを、筆の動きに任せて何かごちゃごちゃとした線で大至目、と描いてそのままにしておいたら、具体的なデザインをそのままメールとさないやばい！と電話があり、泥酔していた僕は、そのまま前に転がっていた赤ワインの瓶のラベルの葡萄の絵を描いて即。無事ピンチを切り抜けた。
左下は、灰羽せいかつ日誌という同人誌用に描いたリアルタイプネム。



■ヒカリ。イメージもはっきりしていたし、描きやすいキャラ。しかし眼鏡は難しい。





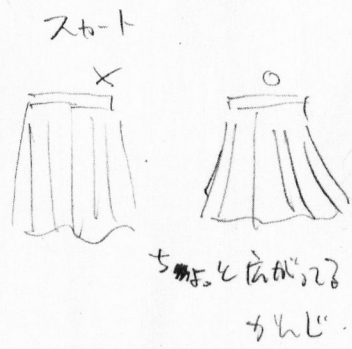
← 目と鼻が少しはみれます

← まで強調

鼻 ちいり。
ほんのちよとだけ上向き

アゴ きかしやな感じ

シッ
いれはす →



ちよと広がる感じ



首細
足細
脚細
足小さい

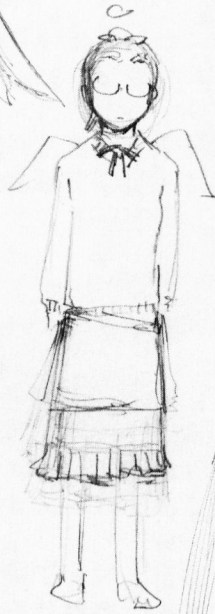
でもごめんちよん
な感じ

耳の横の
髪、フサではな
たよりなげなくらいの
量です
髪が細い感じ

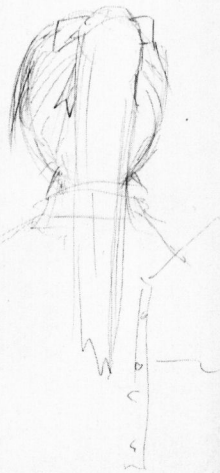
← 小さいワリル



口の
アツアツ
たはは
こら表情
が多い



髪のはきはのくさい
です。



雑記

一話を書き終えて。

まだシナリオの書式が分からず、ひとつひとつ間違いを指摘してもらい、書き方を覚えるので精いっぱいだった。ペラ計算が出来ず、というより、ペラ何枚、という数え方の意味すら分からず、それもメインのスタップにシナリオを読んでもらい、ペラで枚数程度にまとめれば二話分のボリュームとしては適当ではないか、と意見ももらった。

たまたま同人誌用の漫画のネームが一話分として適当だったため、何とか期日までに仕上がった、という感じだった。この時点では、僕がギブアップした時のために、代役の脚本家の方のスケジューリングが押さえてあったらしい。

話以降、既にネタのストックはなく、アドリブで物語をつくり出さなければならぬ。今考えると危うい綱渡りだったなと思うが、キャラクターデザイン、背景や小物の一部の設定のラフ制作など、作業が多すぎて焦る暇すらなかった。

*

*

この物語は、基本的にアドリブで書き進める形式でつくられていたが、アニメ化の話を知った後、アニメ化への準備も兼ねて、同人誌の3話目として何となく考えていたプロットを走り書きしたメモが見つかった。
当時は、オールドホーム周辺は今と同じような風景だが、街の中心地はもう少し近代的、というか、今の日本のような(といっても異世界の違和感のようなものはあるのだが)街並みを考えていたような気がする。
そのメモを描いた直後、仕事でフランスに行き、そこで見た風景のおかげで、グリの街は現在のような景観になったようだ。

当時のメモ類を見返すと、『有限結社灰羽連盟』という単語が見つかった。当時タイトルが決まらず、候補として考えていたものらしい。

同人誌板の『オールドホームの灰羽連』は長いし、ちょっとレト口なイメージがあるという事であまり受けがよくなり、とりあえず『灰羽連盟』という、『オールドホーム』以前に作った昔の同人誌のタイトルを返題として使っていた。
結局締め切りまでにいいタイトルが思いつかず、そのまま灰羽連盟が本タイトルになったが、今考えるとそれによかったと思う。

*

*

その他にも、話師は話手(はなして)と表記されている。これが声に出すといまひとつ締まりがなく、音読みで『わしゅ』になり、最終的に『話師』という呼称で落ち着いた。

*

*

初期設定では、壁の高さは12mとなっていた。結構低い。灰羽手帳も、普通にカード、と呼んでいる。

*

*

レキの部屋に大量の酒瓶が転がっている、という記述も見つかった。アル中か。
レキが絵を描いているという設定は、ごく初期からあったが『オールドホーム』を描いていた時は、まだレキが何を描いているかは決まっていなかった。

*

*

年小組のダイが、トラ、という名で呼ばれている。トラックの運転手になりたらしい。トラックはないよな、という事で変更になったが、三輪の小型トラック(というかりヤカー)は出てくる予定だった。

あとがき

い最後までお付き合いいただきありがとうございました。本来は、ページの上にシナリオ、下に対応する絵を、と考えていましたが、レイアウトしてみると、絵は大きく入れたいし、ひとつの建物、一人の人物に対して、結構な枚数の設定画がある上、今回のように、オールドホームの全員が一度に登場した時など20ページにわたって設定画が続いてしまい、シナリオを分断してしまうので、ラッカ以外のキャラクター設定は、巻末に移動しました。もっといい構成はあると思うのですが、なにぶん50ページを2日で編集しているもので……。続刊ではもう少し読みやすくなるよう工夫してみます。

今回掲載した設定画は、既刊の『灰羽せいかつ日誌』の方で既に紹介したものと重複する部分が多く、『灰羽せいかつ日誌』を買われた方は、ちょっとがっかりさせてしまったかもしれません。

重複する設定を省く事も考えたのですが、今回の本の目的は、僕の書いたシナリオと設定画を出きる限り掲載する事でしたので、メインキャラとオールドホームの設定がまるまる抜けた形では、本としての体裁が非常に悪くなるため、あえて重複する絵も掲載する事にしました。続刊では、DVDの付録で小さく掲載された事はありますが、基本的には初出の絵も増えると思いますし、版權イラストの線画やラフなども含めて、角川書店から出ている画集『グリの街、灰羽の庭で』と合わせて、灰羽連盟という作品を構成する素材を一望できる本にしようと思っています。シナリオも、1話は大きな手直しがあまりなかったため決定稿のみの掲載になりましたが、2話以降、僕が尺を合わせる事が出来ず、毎回膨大にカットされたシーンがありますので、それも一部掲載できればと思います。セリフのある出演シーンが全てカット対象となった非運の門番（と犬）や、出番自体が全てカットとなった図書館のハンバさん、その原因となった前後編でも入りきらないと言われた問題の第5話と図書館地下の謎の開架書庫、大門前で犬に追いつかれるラッカ。白いトカゲとツミという名の少女のお話など、いろいろありますのでお楽しみに。

奥付

灰羽連盟脚本集第一巻

発行責任者 AB/安倍吉俊

発行元 むてけいロマンス

発行年月日 2004年08月15日

連絡先 abetc@mac.com

無断転用を禁じます





